

芥川だより

発行日***2018年3月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870

梵

***** 一部100円です *****

怠け心との競争



朝方目が覚めると、カーテン越しに外を見る。無意識ながらも雨が降っていることを願っている自分がいる。雨であればやめる口実が出来るからだ。新聞配達のパイクがベランダから見えた。配達の人も天気に関わらず毎日配達している。遠い昔、自分も新聞配達をしていて雪が降り薄っすらと白くなった路地を駆け出していた。

一瞬の迷いから覚めて着替えて外に出る。不思議なもので外に出れば気の迷いは飛んでいってしまい。今日も早く走れるだろうか？それだけで頭が一杯になる。昨日は、走れたが今日はわからない。何分にも歳で体のあちこちが痛く無理がきかない…。いろいろと言いつつ言葉が浮かんで消えまた浮かぶ。昨日も頑張って走ったから、今日は緩めにしよう、などとすぐに楽な方に考えがいく。友人が言った言葉が頭をよぎる「水は低きに流れる」人の心も安易な方に傾く。苦勞が多いと予想される方は極力避けたがる。

しかし、それでは面白くない。たとえ難しいと思えることであっても挑戦する気概がないと何のために生きているのか分からない。どうせすぐに人生は終わってしまうのだ。せめて元気なうちに思いきり生きてみようじゃないかと自分を叱咤する。オリンピックの選手を見ていると大きなけがを克服しさらに大きく飛躍している。ケガの功名と言うが確かに私も病気をしていなかったら、今の自分はないと思える。暗闇の中歩いている人を見ると足が悪そうな人が多い。歩きにくそうながらもゆっくりと歩き続ける姿から、きっとあの人も病を抱えながら生きているのだ。自分だけではない、苦しい状況になっても歩き続ける事が生きることだと自分に言い聞かせる。

やり始めたら迷いは消えるが、やり始める前の怠け心がいちばんつらい。やる気と怠け心との競争なのである。競争相手はいつも自分の中にある。果てしなき競争だ。たまにあるケガや病気はひと時の安らぎを得る天からの贈り物とさえ思えてくる。生きていくことは本当に厳しい。とにもかくにも、理屈を言っても始まらない自分の身体を動かし鍛え続ける事でしか自分の怠け心に競り勝つ方法が見つからないから、今日も走る。

死をめぐるあれやこれ(42)

「世界ふしぎ発見！」の裏の顔

石川 吾郎

「世界不思議発見！」と言えば、言わずと知れたテレビの国民的長寿番組。わが家でも土曜の夜はこれを見る事が多くて、子どもたちも小さい頃は大きくなったらミステリーハンターになりたいと夢をもっていた。スポンサーは日立グループ。

ところが最近、とんでもないニュースが報道された。この日立が英国に原子力発電所を輸出するという話し。それも福島第一原発と同じタイプの原発という。原発はよく「トイレのないマンション」に喩えられている。

この契約の内容が、さらに驚くべきものだ。万一事故があった場合の賠償責任は、日本政府が担保することになっている。つまり税金によって国民は莫大な金額を支払わされることになるのだ。つまり日立と狂った安倍政権のために、国民が気づかり知らぬ間に、保証人のハンコを押してしまふ、ということになるわけだ。「もうけは日立と原発の利益共同体へ、損失は国民へ」という図式になる。

フクシマ原発事故の収束も全くメドが立たない状態で、その費用も今後どれほどになるのが分からないのに、国民の税金を担保に入れ、社会福祉や教育の予算は削りに削り、トイレのないマンションを輸出する。しかも核廃棄物を日本に引き受けるともいわれている。(裏につづく)

これは私たち国民を人質にした、安倍政権と日立の売国的な企みといえないだろうか。

一家で楽しく「不思議発見」の番組を見ている裏で、これほど許し難いことが進行している。

ところで安倍政権を支える主要な推進団体は、経団連なのだが、次期の経団連の会長が、日立製作所の中西宏明氏が就任予定になっているという。まさに国民を犠牲にして、アベ友に利益をもたらす構図は、森友・加計問題と同じ構図そのものと言える。原発輸出に失敗して大損をして「サザエさん」のスポンサーを降りた東芝の例を思い起こさせるが、この日立の例は国民の税金を担保にとるという点で、東芝以上に悪質だといえるのではないか。

またこの国会で過労死を増やすと大きな問題になっている「裁量労働制」（残業代ゼロ法案）で、その法案の根拠になっていたデータがインチキ・でたらめの極みだったことが明らかになったが、それでも今国会でこの法案を通すことがぜひとも必要だと現経団連会長・榊原がコメントを発表した。これはまさに安倍政権の狂気の暴走を誰が支えているのかを端的に示すものだと言える（ちなみに経団連は常に消費税の増税を主張し続けている）。

巻頭エッセイ

巻頭コラム

素老人☆よもだ帳 48

哲学座のつぶやき 44

大峯奥駈道 16

大人の今昔物語 43

我がおくのほそ道の旅 14

B級サラリーマン渡世譚 56

オクラの山たより 18

今城塚古墳と磐井の乱

おあいそお願い

応援演説

編集後記

女90年の軌跡

俳句

下村嘉明

石川吾郎

坂本一光

祖蔵哲

梵店主

石川吾郎

成瀬和之

明石幸次郎

困了生

満田正賢

大江雉兎

下村嘉明

嘉

眞樞

土田裕

影山武司

1

1

2

6

7

8

9

9

10

15

18

19

19

20

20



素老人☆よもだ帳 (48)

坂本 一光

◆梅咲いて庭中に青鯨が来ている

表題は、戦後の俳句界を代表する俳人、金子兜太氏の作。社会性俳句の旗手であった氏は、この句のとおり梅香る二月二十日、九十八歳で亡くなった。朝起きて梅の咲いた庭を見ると芽吹きを孕んで海の底のように青めいている、それがまるで青鯨が来ているように見えたのか。あるいは、梅の花の背景に広がる青空に、大勢の戦友が餓死との悲惨な戦いに散ったトラク島（トラク島）の海を見たのか。捕虜となり島を去るときに船上から詠んだという句は氏の代表作。

みおはて 水脈の果炎天の墓碑を置きて去る

季節や定型に必ずしもこだわらず、自由な、鋭く力強い作風で反戦や平和の問題も詠んだ氏は、二〇一五年、安倍政権が安保法制（戦争法）を強行したとき、旧知の作家・澤地久枝氏の依頼を受け、『アベ政治を許さない』と揮毫した。以来毎月三日、素老人の住む街でもこの揮毫ポスターを掲げて安倍政権に抗議するスタンディング行動が続いている。金子兜太氏逝く、の報に接し改めて氏の作品をまとめて読んでみたいと思った。いま私の手元に氏の著書『今日の俳句』がある（光文社 KAPPA BOOKS、一九六五年）。その副題に言う、『古池の「わび」

よりダムの「感動」へ』と。この本の復刻版（知恵の森文庫、光文社、二〇〇二年）の副題は、『古池の「わび」より海の「感動」へ』と改められた。師の面目躍如たるものがある。

さて、素老人は縁あって川柳を始め四年半になる。地元の新聞の『読者文芸』欄に月二回『お題』をいただいて投句したり、地元川柳会が年に数回開催する大会に参加したりしている。また大阪に本社を置く全国規模の川柳会誌に、昨年来投句も始めた。率直に言つて素老人には俳句と川柳の違いはわからない。素人目にはいい川柳だなどと思う俳句に出会うこともあるし、その逆もある。たとえば芭蕉の『旅に病で夢は枯野をかけ廻る』も、兜太の『よく眠る夢の枯野が青むまで』も、私には絶対詠めないだろうが、いい川柳だなあと思えるのである。一般的に言えば、川柳の方が俳句よりも具体的な個人である私との関わりが強く表現されているように思う。が、この違いは定かではない。ただ、川柳をやっている者から見ると、たまに目にする最近の俳句はほとんど川柳の方に近づいてきているように思ってしまうがどうだろうか。いづれにしても、川柳も俳句もその短詩の中に、人間を歌い人生を歌い私を歌う。人間と言ひ、人生と言ひ、私と言ひ、つまるところ歌う題材は人間とその社会、その歴史、それらを包み込む自然にまで及ぶだろう。川柳も俳句も、句は作者の人生、作者の世界理解を表す。以上は、へたな柳人

を自称する素老人の勝手な言い分である。
それでは、素老人はどんな川柳を詠んできたか。この一年を中心に少し振り返ってみたい。拙い川柳へのお付き合いをお許しいただきたい。

○自由詠(1)

迎え火を揺らす時代の風を読む
戦争は徐々に近づきあつと来る
息子夫父まで鬼にする戦
帰れない故郷づくり再稼働
水ぬるむ水の怒りの解けぬまま
沖繩は怒りを水に流さない
安らかに眠れと言うか核の傘
一滴の戦死の涙ない戦後
臆病で弱虫でいい平和主義
九条があれば平和もありふれる
大地水空気のごとく平和あれ
この胸の誇り戦を知らぬこと

○自由詠(2)

九条が戦の扉閉じたはず
乗り換えのできぬ地球にまだ戦
もう少し賢くなれよ地球人
憲法と平和に似合う青い空
一粒の水の巡礼地球旅
森と海互いに育て育てられ

ありふれた水が命に満ちる星
ありふれたものに奇跡がある不思議
地のすべて命をつなぐ輪になつて
命なきものと命が輪をつくる
終わらない命なくならない命
生きて逝く次の命の始まりに
つなぐ手と手が新しい命生む
万物が和して命の揺りかごに
まだ戦後平和誓って焚く門火
人と人と自然の和の命
ヒロシマとナガサキ核の傘の下
再稼働帰れぬ町に知らん振り
九条の真に深い平和主義
男より女の生きる真剣さ
女より男の通す筋ひとつ
活断層国の炉心を融かす揺れ
門火にもできぬ核の火まだ燃やす
希望という名の電車なら乗ってみる

去年今年貫く棒のない政治
新年は獅子の時代を夢に見る
人のため生きて自分を生きた母
砥部焼の亡父の壺にいる伍健

注:『考えを直せばふつと出る笑い』

一滴の水の向こうに大宇宙
—前田伍健

水の輪のまんまるまるい命の輪
命なきものと命をつなぐ水
ありふれた水に奇跡がありふれる
一滴の水に見果てぬ万華鏡
窓越しの陽はぬくいなあ山頭火
一滴の酒も涙も水の精
ありふれた水に花咲く命咲く
どこにでも水と平和はない地球
美しい国に九条ある平和

○自由詠(3)

読売で加憲の意味がよくわかり
腹心の友共謀の友になり
一晩で国民そっぽを向く政治
送り火に平和を誓う敗戦日
ミサイルより警報が要るオスプレイ
日産くん検査したのはどの車
ていねいな説明がない認可ごと

フクシマも辺野古も解けず水ぬるむ
出まかせも本気になるぞ核兵器
敗戦も憲法の日も青い空
大地震どこ吹く風と稼働中
死に切れぬ思いを巨泉言い遣す
朝に道問えば夕べに道半ば
失敗も基準変えれば道半ば
同盟の絆が島の枷になる
司法まで島の民意に枷はめる
同盟の絆に司法「頭、右!」
三十年朽ちるセメント朽ちぬ核
後ずさりするな平和が土俵際
被爆国核なき世界遠ざける
政治家が問えば知恵出す春の闇
付度が神風吹かす春の闇
戦への扉二度とは開けさせぬ

初日の出百寿の母の頬に紅
九条の国の初日のあたたかさ
平和への歩み憲法七十年
ありふれた平和と九条あればこそ
殺すこと殺されることない平和
平和をと老いも若きも祈る年
ありふれた平和は奇跡まだ戦後
若いから賢くないとなぜ言える
年取れば賢くなるとなぜ言える
肩書きが取れて私がボクになる
精神は広くて弱いこともある
精神は狭くて狭いこともある
考える輩の精神揺れている
悠久の進化の果ての核武装
忘れないのによつて来る戦
大地水空気を汚す放射能

太平の眠り吹き飛ぶ自然力
凍土壁怒りで水も凍らない
増殖炉文殊の知恵も借りられず
桜咲く廃炉の誓いまた重ね

帰れない町他所事に再稼働
絵空事万年核のゴミ管理
千年に一度の備え明日のため
芽吹く野に命のバトンつなく夢
一年生枅目いっぱいあいうえお

定年日サラダの皿の酢の香り
育児書のほこり払って孫の世話
音読も黙読もいい五七五
いつの世も濡れ手に泡は露と消え
一面の芽吹き枯野を包む春

驚いて不思議に思う自然の美
万物の霊長今日も戦テロ
リメンバールパールハーバーだけじゃない
不可思議は被爆の国の核の傘
千年に一度に人は備えない

戦なく飢えることないよい国に
戦への扉閉ざして七十年
被爆者に入れと言うか核の傘
再稼働水も大地も動く国

迎え火も時代の風に揺れはじめ
見上げれば心開けば空は青
我が心空に放つて風に乗る
なるほどと思えば心放たれる

百越えた母の背中を抱く介護
ミサイルより老老介護危機の国
話聞くだけで加齢と医者言う

鶴一羽祈る国連日本席
被爆国背を向け恥じぬ核禁止
安らかなれぬ過ち核の傘
骨太は太い奴だけ太らせる

心棒がなくて海月になる政治
また会えるときには会おう何度でも
久方の語りは尽きず酌み交す

天地の差戦前戦後一字でも
天地の差日本酒飲むか米食うか
酒は人九条世界丸くする

ありがたや米が酒にもなる不思議
蜘蛛の巣の向こう側にもある宇宙
まっすぐに立ち位置変えず島の杉
自分の目耳と頭で知る真

美しい国は戦を捨てたはず
七十年越えて憲法平和追う

付度も記憶にないも昔から
物を食う口は余計なことも言う
のど元を過ぎてないのにもう忘れ
単純なこと複雑にする政治

政治家の常識になる非常識
政治家に僕の明日は託せない

○題詠

花

早咲きも遅咲きもいい人の花

顔

人は若い真の花の顔になる

競う

老いを知り我が身と競う我が心

扉

戦する国への扉開けさせぬ

薬

お薬もお粥に混ぜて母介護

ブーム

ブームにはならなくていい平和主義

もつと

もつと右もつと右へと国の舵

指

核禁止被爆の国に後ろ指

引く

身を引いて次の芽吹きを待つ枯れ野

驚く

水が水に浮く何の不思議もないけれど

濡れる

朝露に輝きを増す蜘蛛の糸

渋い
渋々も心ならずももうご免
追う
国追われ海も砂漠も越える民

爪

核の爪地球のどこに立てるのか

夢中

穴掘りに夢中になればボロも出る

ページ

核禁止歴史のページ開く夏

背

九条に背を向け入る核の傘

結ぶ

こぼれ種咲いて私はここにいる

逃げる

まことから逃げれば遠い人の道

靴

まっさらな靴がスキップする小道

自分の句をこうして振り返ってみると、
これもまた『アベ政治』の反映か、時事問
題に怒り狂い過ぎていたようにも思える。

その点では、川柳一句にせよ非力ではない
と信じていたが、同時に、人と自然に託
して私の中の私を表現する川柳を目指し、

学ぶ本質である『人間はどう生きてきたか
を知り、自分はどう生きるかと問う』心を
追求したいと思う。大げさに言うが、私が
思う川柳の王道である。やさしい言葉に人
と自然の深さ、不思議さ、おもしろさをど
う込めるか、難しい課題ではある。

(かたちは心であり、心はかたちになる)大
分の素老人

意識を哲学する (二)

〔芥川文学賞のなかの「老い」―「意識」

私のアカデミーでの専門分野は哲学である。哲学は文化系の学部であるが経済学部でもないし、社会科学、政治学部でもない、まぎれもない文学部である。この学部の中心は文字通り「文学」のはずである。しかし、小生、めったに最近の文学、小説類は読まない。いわゆる現代文学の類である。文学体験は私の場合、戦後二、三〇年の作品で停止している。そして私が考えるに、哲学と文学の関係はそのものも、世紀という単位で大きく変化している。それは接近したり離れたりである。

文学の定義はおなじみのネット辞典では『文学とは、「言語表現」による「芸術」作品のこと。文芸ともいう。狭義には、詩・小説・戯曲・随筆などを典型的な文学の例とする』とある。ここで重要なのは芸術という概念である。さらにその定義を参照すると『芸術とは、表現者あるいは表現物と、鑑賞者が相互に作用し合うことなどで、精神的・感覚的な変動を得ようとする活動。文芸(言語芸術)、美術(造形芸術)、音楽(音響芸術)、演劇・映画(総合芸術)などを指す』である。つまり文学とは『精神的(心的) 感覚的(経験的)「変動」を言語による表現によって体験、獲得すること』である。では

その対象である、表現者と鑑賞者の間にある「心的変動」とは何か。それが「美」である。

「美」とは何かを考えたのは古代ギリシヤの哲人プラトンに始まる。このプラトンが「芸術」に対して驚くような考えをもっていたというのはよく知られている。いわゆる「詩人追放説」である。これは「文学」を真のイデアから一番遠い下級の芸術とみていたものである。その理屈はやはり彼のイデア論からきている。イデア論とは、人間が地上の花とか夕焼けを見てそれらを美しいと感じるのは、かつてイデア界で「美の真実」を見てきたのだ。今はそのイデア界には行けない。しかし、イデアを辿ろうとする人間の行為はミメシス(模倣)としてイデアを経験できるとした。これがミメシス論だ。プラトンは寝椅子の例を持ち出し、その製作者を「神」「職人」「画家」の三つに段階分けて説明する。

1. 唯一の寝椅子のイデア(真相)を現実化する神。
2. 寝椅子のイデアに基づいて個々の寝椅子を作る職人。
3. 神や職人の寝椅子を真似てその描像(寝椅子と見えるもの)を描く画家。

ホメロスのような吟遊詩人など芸術一般の生み手は、画家と同じ「真似る」ものであり、「真実という王から遠ざかる三番目のもの」とされる。文学もまた、現実世界に存在するものである以上、ミメシスであるが、詩人が例えば愛について書くとき、

愛のイデア(大文字の Love)ではなく、現実の愛(小文字の love)を描いているのだ、とプラトンは言う。つまり、詩人は、理想的な愛の歪んだ模倣である現実の愛を詩に描いている(模倣している)ことになる。したがって、詩はすでに模倣であるものを模倣していることになるので、真実から二重に遠ざかっているということになる。このようなものは人びとの心には害毒を与えるものであり、絶対に受け入れられない憤慨している。

このように人類の思考の開始から哲学と文学は仲が悪かったのである。これは現代ではもうあたりまえで皆が気がついていないが、「美」そのものに対する意識の変化にも現れている。プラトンが問題にしたのは「美」のための「美しさ」の追求である。しかし、近代では「美」そのものが目的となることがない。それは「快適さ」「便利さ」「幸せ」という目的を達成する「手段」としての「美」になっている。

このような手段としての「美」は近代産業社会の誕生とともに極端に「手段化」される。美術作品が投機の対象となり金儲けが目的となるようになる。文学作品もまた「ベストセラー」が目的となった。

このような「美」の概念が「アート」である。私たちが今日芸術と呼んでいるのはこの「アート」のことである。だが芸術としての「アート」は近代的な概念なのである。ということはそれ以前には「芸術」はなかったことになる。あるのは

ただ「美」そのものであった。そしてこのような芸術(アート)に対して反動的に生まれたのがフライングアート「純粹芸術」である。これは専ら芸術的価値のみを追求する表現活動を意味する。古代復古でもある。これに対するアートは応用芸術とよばれることがある。

このように芸術としての文学と哲学は大きな隔たりがある。もともと哲学は自然科学とともに発展してきたと、このコラムでも話をしたが、文学と科学に大きな隔たりがあることである。しかし現代では少し様子が変わってきている。自然科学が哲学と文学の領域に侵入してきたことである。これも以前に説明したが、文学による「空想、想像の世界」の存在が科学によって実在が証明されたり、また哲学のような「真実」の存在の実在も実証されだしてきている。このことは何を意味しているのか。根本的に「文学」と「哲学」は同じではないのか。つまり私たち人間が想像「意識」できるものだけが「存在」しているといえるのではないのか。科学はそれを「確認」しているだけではないのか。つまりわれわれの「意識」は「世界」を創り出すことができるのではないかということも思う。そういう意味からは「文学」をすることも意味があるし読むことも意味があるのである。以上のようなひねくれた考えで私は「文学」を読んできている。そして現在は「ベストセラー」のチェックとなぜか芥川賞作品だけはフォローするようにし

ている。しかし、現代の文学作品はなかなか「美」に触れるものがない。表現力が低下したのか、それ以前の心的感覺能力が低下したのか、美的体験そのものがないのか。それとも「美」が存在しないのか。しかし、現代文学もそもそもはじめからフラインアートが目的であるのかどうかもわからない。そんなここ最近の文学作品、といってもほとんど芥川賞

の受賞作「おらおらでひとりいぐも」は私にも少しヒットした。作者は六三歳の女性。新聞記事では芥川賞二番目の高齢受賞者と書いてある。最高齢受賞は皆忘れていると思うが五年前の「a bさん」の作者、七五歳だ。最高齢者の受賞作が忘れられているのは最初から理由がある。私も読んだが、普通の人には多分理解できないであろう。「a bさん」は全文横書きで、ひらがなを多用し、固有名詞や「カタカナを一切使っていない。さらに、「日本語の限界に挑んだ超実験小説」であった。「美」のためによる「美の実験」であり、さらにわかりづらい。作者の年齢とは無関係な「作品」であった。しかし、今回の作品は年齢が一回りも若いのに「若い」の文学と評価されている。そして作者が東北出身であるため「方言」の使い方の面白さも評価されている。つまり評価が「若い」と「言語」としてとらえられているのだ。多分、選者は無意識でこの「若い」が「高齢者」にしか表現できないし、この「方言」言語表現

が東北出身者にしか表現できないから受賞に値すると思っているであろう。しかし、哲学的「美」の判断では逆である。私たち人間はすでに「美」を持っていてそれが「自然」「宇宙」と合致する。なぜなら私たち人間は自然の一部であるからであると考える。この過程が「意識」の本質である。

小説のあらすじを出版コピーから引用するとこうだ。『結婚を三日後に控えた二四歳の秋、東京五輪のファンファーレに押し出されるように故郷を飛び出した主人公、桃子さん。身ひとつで上野駅に降り立ってから五〇年。住み込みのアルバイト、出会いと結婚、二児の誕生と成長、夫の突然の死……。この先一人でどうやって暮らす。こまったあどうすんべえ』東京近郊の新興住宅で、ひとり茶をすすり、ねずみの音に耳をすませるうちに、桃子さんの内から外から、声が沸き上がりはじめる。捨てた故郷、疎遠な息子と娘、そして亡き夫への溢れる愛。震えるような悲しみの果てに、桃子さんが辿り着いた境地とは？』。実際のストーリーはもうすでに七四歳になり夫に先立たれ一人アパートに暮らす主人公が部屋の中で自分の中の自分とモノログすることで、過去を思い出すことから話がすすむ。主人公が家の外に出かけるのは夫の墓参りをする一日だけだ。普通の小説のような場面変化も対人関係の変化もほとんどない。一般受けのストーリー展開は皆無といってよい。おそらく芥川賞選者が先

ほど述べて「美」に対する無意識の力を感じ取れていなかったら選んでいなかったであろう。案の定、選者の評価を読んでもなぜこの小説を選んだのかという正確な理由は誰一人として述べていない。それほど「意識」の力はまだわからないものである。

後に知ったことであるがこの小説は宮沢賢治の詩「永訣の朝」からヒントを得ているという。タイトルの「おらおらでひとりいぐも」は賢治の妹が死の床で発する最後の言葉「私は私ひとり逝くから」である。原詩はこの箇所だけローマ字にしてある。最高齢受賞作「a bさん」と同じ表現方法である。プラトンが嫌う詩人の作品であるが読んでみた。短い詩であるので五分もかからぬうちに読めたが、衝撃を受けた。全文ほとんど東北方言でかかっているがそれは関係ない。そもそも標準語という概念が怪しい。それは恣意的な表現手段であり自分自身の言葉ではないからである。そんなことは文学者でなくとも自明である。標準語と数字記号との違いは方言と自己意識との差よりも小さい。それはともかく、賢治の詩は短いながら「宇宙」がある。が、よく知られているが賢治は法華経の熱心な信者であった。しかし属していた教団は国家主義的な要素をもった新興集団であり実際に「八紘一宇」という大東亜スローガンはこの教団の教祖が考えたものだ。そのような思想に基づいて作られた「詩」という文学もまた、プラトンのい

うように「美」の真実からは程遠いものなのか。それとも文学でなく宗教なのか。再び、受賞作に戻るが、この小説のテーマは先ほども述べた「若い」である。そして主人公の「孤独」。主人公は愛する夫が先だったのは自分に「自由」を得させるためであったと回想する。夫のため、子供のための人生から自分のための「自由」を気づかせてくれたと。現実はどうあれ、「別の世界」を私が創ることができる。「自由」があるということに気がついたという。もともと一人である。しかし、一人では自由の意味はない。他があらはじめて、それからの「自由」が始まるのである。そのために「私の中の私」が必要なのである。これが「意識」である。「若い」はこのコラムのテーマでもあった「死」の予感でもある。しかし、「若い」とはなんだろう。またもネット辞典のお世話になろう。『老化とは、生物学的には時間の経過とともに生物の個体に起こる変化。その中でも特に生物が死に至るまでの間に起こる機能低下やその過程を指す。』とある。またもや「死」という言葉が出てきた。以前にも考えたが、この「死」の客観的定義は不安定である。それはともかく、一つ不思議なことがある。生物を生かしているのは「細胞」である。知られているように私たちが人間は二六〇種類合計六〇兆個ぐらいの細胞で構成されている。しかし、それぞれの細胞には寿命があり死んでいく。一番短いのは一日で

大峯奥駆道(16)

梵店主

死に、そして入れ替わる。自然に寿命が来て死んだ細胞はその数だけ増殖して補われるのである。これが「修復」である。この「修復」作用が停止するのが生物の「死」である。不思議なことは「細胞単位」では人間を含めた生物は何回も死んでいるのである。一年前の私と今の私は細胞レベルでの「私」とは「他人」である。これがなぜ同じ「私」と「意識」できるのか。顔かたちがよく似ているだけなのか。

部分である細胞が集まって全体の人間を構成している。一つの細胞を六〇兆個集めたらそれぞれの細胞と違う性質のものになる。細胞レベルではない人間の「私」を支配する「意識」とは何なのか。昨日の私と今の私をつなぐものは何なのか。昨日のことを「覚えている」から今の私がいるのか。それでは私を成り立たせている根拠は「記憶」なのか。「私」の「意識」は「今」この瞬間を捉えることにはている。これは確かだろう。しかし、その少し前はどうか、それは何処にあるのか。一年前の私は何処にあるのか。そしてその「記憶」は真実かどうか。私達はよく「記憶」の曖昧さを経験する。子供の頃に体験した場所に言ってみると、少し記憶していた様子とはちがっていたり。幼馴染と再会し昔の話をしている、それぞれの同じ思い出の内容が違っていたりする。「あやふやな記憶」である。それらの「不安定」ものに私達は「意識」の根拠をもって生きているのか。次回はこの「記憶」と「意識」のことを考えよう。

大普賢岳

ずいぶん前になるが、確か十津川へ行った帰り、車の中から岩峰の続く山を見て、あんな山に登れるんやろうか？と思つたことがあつた。垂直にそそり立つ岩壁、ギザギザに見える稜線、とてもじゃないが登れるルートがあるとは思えなかつた。

その岩峰が、実は大普賢岳から行者還岳へと続く稜線であつたのである。小笹の宿を早朝に出発して大峯奥駆道のハイライトともいえる大普賢岳へ向かう、どんな厳しい岩山が待っているのか不安と期待とでワクワクした気分であつた。

しばらく歩くと女人結界門がある。女人禁制の区域を出たことになる。ここから先は女性が自由に歩ける。関東から来た女性も独りでこの門をくぐり先を急いだことだろう。あれから彼女を見ないから私たちより早く歩いているに違いない。

このあたりから益々神秘的な深山の風景になつてくる。私がかれまで歩いて来た山とは違つた雰囲気になつて来た。何が違ふかと言えば、山の荒らしさが消え物静かで優しい風情を感じたのである。大きな樹々が立ち並び膝下ぐらいの草木が所々生えていて静寂した空間を作つていた。

大きな荷物を担ぎ荒らしい息遣いの我々が歩くのが何か場違いに感じるほどであつた。私の山歩きの経験から、確かに似たような山域はあつた。

夏、白馬から日本海の親不知までの夏山合宿の時に、朝日岳に向かう稜線でお花畑を見た時もそうであつた。踏み跡もなく一面に咲き乱れる花を踏みつけて歩くのに気が引けた。後輩たちが「こんなきれいな場所はありませんよ、ここでテントを張りましょう」などと騒いだことがあつた。

この時に、私は歩くコースを間違っているのかと疑つたが、なにぶん歩く人が少ない山域だから、人に荒らされず花の樂園が守られているのだと思つた。山の自然を守るためには、人が歩かないのが一番だと分り切つた事を改めて悟つた。ところが、この大峯の奥駆は何か違つている。千数百年も前から多くの修験者が歩いているはずなのだが、人が歩いたアカが消えている。妙な場所だ。

いよいよ、大普賢岳の登りにきた、麓から見えた切り立った岩壁は東斜面であつて、尾根の西側は穏やかな草地になつていた。ひざ丈位の笹の中につけられた道を上つていくと、大普賢岳の頂上へ行く道と巻き道の分岐に来た。

どちらかを登るか迷つたが、やはり先のことを考え、体力の消耗を心配して巻き道を行くことにした。低い笹が覆う斜面は心が清められる思いがする。とて

も岩壁の稜線とは想像がつかなかつた。

半時間ばかり歩くと急な斜面のトラバースになる。ほとんど木が生えていない斜面が続く。木が生えていないということは、冬に雪崩が多発しているからだと考えた。この傾斜なら転んだら止まらないだろうと思つた。この大峯も冬の降雪は相当あるだろうと想像する。

もし、冬に縦走するとした相当難しいコースに違いない。二メートルも積もれば、雪崩が恐ろしくてトラバースは出来ない。尾根伝いに歩かなければならないから大変だ、などと思ひながら歩くと、いよいよ鎖場と梯子の登りが始まつた。これからの気を引き締めて重い荷を担ぐ。

数年前に皇太子が歩かれていたので、山上ヶ岳から弥山までは、道の整備は出てくるはずだから、あまり心配はしていなかつたが、なにぶん昔だから木の梯子もだいぶ古くなり歩きにくい。

幾つもの梯子や鎖場を登つたり下つたりして心底疲れた私は、この荷物では本宮までは無理だなあと考えた。少しのミスも許されない緊張する稜線が果てしなく続くように思つたのである。そして、いつ歩けなくなるかという不安が強くなり抑えることが出来なくなつてきた。悲しいかな、こうなると私は弱い。調子が良い時はいいのだが、逆境には弱い性格なのである。もう無性に山を下りたくなつてきた。リタイヤの言葉が頭にへばりついて離れない。

今回は、一旦は別れた妻に、再び会うが、それは元の妻ではなかった・・・という怪異譚。どこかで読んだか聞いたか、遠い記憶のある話です。

人の妻、死後に夫に会う話し (巻第二十七 第四話)

今は昔、京に住む一人の身分の低い若侍がいた。生活の伝手もなく貧しく生活をしてきた。そんなところに思いも掛けず、昔から知り合いの人がある国の守に就任したと聞いたので、その人のもとを尋ねた。その守「当てに出来る人もなく、こうして都でくすぶっているより、ワシの任国に連れて来るなら、多少の面倒もみてやろうじやないか。かねてから可哀想とは思っていたのだが、自分も不如意の身だった。しかし今回、任国に下るにあたって連れて行ってやるが、どうだ」と言う。この侍「これは有りがたいこと、喜んで」と返事をする。

ところでこの侍には年来連れ添った妻がいた。貧しさは耐え難かったが、年もまだ若く、姿かたちもよく、態度も愛らしかった。自分の貧しさも顧みず、互に分かれがたく通っていたのだった。このたび男が遠い国に下るにあたって、この妻とは別れて、たちまち後ろ盾のしつかりした女を妻にしてしまった。この新しい妻は万事、男の世話をして、準備をしてくれたので、男はこの新しい妻を連れて任国に下っ

ていった。

任国にいる間、男は何かにつけて裕福になつていった。こうして羽振りよく思うままに過ごしていたが、あるとき、この都に捨て残してきた昔の妻が無性に恋しく会いたくなり、「一刻も早く都に帰り、逢いたいもの。どうしているだろうか」と、わが身もよじれるような思いをして、何かと心そぞろに過すようになった。はかなく年月は過ぎ、ようやく主人の任期も終わりになつたので、守が都に上るのに伴い、この侍も都に上つていった。

* * *

「自分が元の妻と別れたのは、間違ひだった。京に上つたら、そのまま元の妻の所に行つて一緒に住もう」と心に決めて、都に着くやいなや新しい妻は家に遣つて、男は旅の装束そのままに元の妻の家に行つた。家の門は開け放たれていたの、入つてみる。と、かつての様子とは見る影なく、家はすっかり荒れ果て、人が住んでいない。配もない。これを見て、哀れさはいやまざり、心細いこと限らない。おりしも九月の二十日頃、月は明るく照らしている。秋の夜寒になり、しみじみと胸苦しいほど。家の中に入ると、かつてと同じところに妻が一人いた。他に人はいない。男を見て恨むそぶりもみせず、嬉し気のように見える。

「いかがお過ごしましたか。何時に京にお戻りになりましたの」と言うので、男は下つた国での積もる思いを語り「これからはこうして共に住もう。国から持ち帰った物

なども、明日にすぐ取り寄せよう。今夜はこのことだけでも伝えよう」と来たのだよ」と言う。妻は喜ぶようすで、積もる話をして、夜も更け「今は寝ようか」と、南向きの寢室に行き、いだき合つて寝た。男「ここには、人はいないのか」と尋ねると、女「こんな暮らしですので、使用人もおりません」と言いながら、長い夜を夜もすがら互いに物語りするほどに、以前よりも男は身に染みて哀れに感じた。

そうこうするうちに明け方になつたので、二人は共に寝入つた。夜明けも知らずに、明々と陽が昇りだすのも知らなかつた。昨夜は人手もなかつたので、葎とらの下半分だけを立て、上を下ろすことをしてないので、陽光がキラキラと射し込んできて、男ははつと目覚めた。見ると、自分がかき抱いて寝ていたのは、すっかり干からびて骨と皮ばかりになつた死人であつた。これはどうしたことかと、驚き、恐怖に襲われ、衣をとつさに取つて、走り下り、もしや見間違ひではないかと、確かめてみるが、紛れもない死人だつた。

つかんだ水干袴すいかんばつを、あわてて身につけ、逃げだし、となりの小家に入り、今初めて来たように取り繕つて尋ねるに「この隣りの人はどこにおいでか。この家には住む人はおいででないのか」と言うと、その家の人の言うには「そのお人は、何年も連れ添つたお方が遠い国にお下りなされたので、それを思いつめ嘆いているうちに、病みついてしまったのですが、それを世話する人もなくて、この夏に亡くなつてしまわれました。後を弔う人もなく、いまだそのまま

になつておりますが、怖がつて誰も近づく人もなく、家はそのままになつております。」

これを聞いた男は、いよいよ恐怖に襲われた。だが、かといつてどうすることもできず、男はそのまま空しく帰つて行つた。

* * *

どれほど恐ろしかったことだろう。魂がこの世に留まり、逢つたのだつた。思うに、積年の思いがつのつて、夫婦関係を結んだのだろう。こんな希有のことがあつた、ということだ。

というわけで、このようなこともあるのだから、何年も経つてから逢うのは、あらかじめよく調べてからに逢うべきである、語り伝えられていることだ。

《コメント》

この話し、どこかで読んだことがあるなあと思つていたら、上田秋成の「雨月物語」の「浅茅が宿」がこの話しに似た筋立てになつている、ということだ。

ただ「浅茅が宿」の原話は中国・明時代の『剪灯新話』ということですので、「今昔」のこの話しの方が時代的に早く、もつと古い共通の典拠があつたことを想像させます。

話しに出てくる「葎」は、上下半分ずつに別れる雨戸のようなもの、また「水干袴」は、平安時代の簡素な装束で、イメージとしてはオリンピックのファイギュアで羽生選手がフリーで着たもの(安倍晴明に扮している)に長めの袖を付けたようなものといえそうです。

我がおくのほそ道の旅 (14)

成瀬 和之

松尾芭蕉は伊賀上野に生まれ、大阪の南御堂前の門人の家で亡くなりました。

そして、芭蕉の希望で大津の義仲寺に葬られます。そんなことから、芭蕉は関西人であったとも言えます。そこで、「我がおくのほそ道の旅」は、伊賀上野、南御堂、義仲寺へと向かうことにします。

芭蕉は一六四四年伊賀の上野（三重県上野市赤坂町）に松尾与左衛門の次男として生まれました。

松尾氏というのは、もと服部郷松尾によつた伊賀平氏で、中世においては南伊賀一円に有力な土豪集団を結党していました。ところが、この松尾氏は、織田信長の徹底的な焼土侵攻作戦の結果、他の伊賀の地侍とともに殲滅されてしまい、わずかにのがれた後裔の一部です。芭蕉の血の中には、近代化の渦動の中で本拠地を追われた敗残者の血が色濃く流れていたわけで、その漂泊の人生は、「時の敗者」としての自認に深く根ざしています。

なぜ芭蕉は源義経や義仲に心を寄せたのか？その背景には松尾家の歴史が関わっているのではないのでしょうか。

芭蕉の生家の前に「古里や臍のをに泣としのくれ」の句碑が立っています。そして、その解説には、次のように記されています。

貞享四年（一六八七）芭蕉四四歳の作。

季語「年の暮」で冬。『笈の小文』の旅で故郷伊賀上野に帰郷した折の歳暮吟『千鳥掛』（知足編）に「歳暮」と題し、

「代々の賢き人々も、古郷は忘れがたきものにおもほえ侍るよし。」と、

芭蕉のその折の感慨が収められている。臍の緒は子供の生誕の日付などを記し大切に保存しておく風習がある。母親が死去したとき棺に葬るが、このとき兄松尾半左衛門から大切に保存されていた自らの臍の緒を見せられ、芭蕉の胸中には今は亡き父母を偲び慈愛の情が込みあげてきたのであろう。「古里や」に、今故郷の地を踏みしめている感慨が表れ、「へその緒に泣く」の語に、切実な親子の情を言い得ている感がする。なお、「臍」の読みは芭蕉真蹟懐紙のかな書き「へそ」に従う。

句の意は、「年の暮に年老いた兄妹のいる故郷の生家に帰り、自分のへその緒をふと手に取ってみた。今は亡き父母の面影が偲はれ、懐旧の情に堪えかね涙にくれるばかりである。

一六八七年というのは、芭蕉が「奥のほそみちの旅」に出発する二年前のことです。「人生五十年」と言われた時代のことです。実際に芭蕉は五十一歳で亡くなっています。今の六十歳代の私たちよりも、「晩年」の感慨は深かったのではないのでしょうか？

また、上野市には芭蕉翁記念館があり、芭蕉ならびに蕉門関係の真蹟類や遺物を収蔵し、展示しています。

B級サラリーマン渡世譚 (56)

明石 幸次郎

担当者の役割（韓国編）

明石は、K田部長が言った「交渉にはストーリーがある」と言われたが、そのストーリーを演じる役者もいるのではと思った。その役者を知るために、M居から渡された韓国の引き継ぎ書を見ていた。

その中に、関係会社として、仲介会社（金栄商事、金相坤社長）という会社が書いてあった。窓口商社はM商事があるのに、なぜ、もう一社、仲介会社を入れているのか、気になったので、隣の席のM居に「ちよつと良いですか？」と顔を向けて話しかけた。

「M居さんが書かれた引き継ぎ書の、仲介会社の金栄商事はどういう役割の会社で、金さんはどういう方ですか？」と質問した。

「ああ。金栄の金さんなあ？俺もよく分からんのだが、韓国と国交が回復する前は、日本の商社は活動が制限されていて、駐在員を置いても代表は韓国人しか駄目であつたらしい。その時にM商事のソウル支店長の様な役割をしていた人だららしい。その後、国交が回復されてから、日本人が支店長になれるようになった。その時に、M商事がそれまでの金さんの功績と彼の韓国内の人脈が使えると考え、お互いの利益の為に作った会社らしい。金さんは、韓国のD工業のオーナーの会

長、社長とも差して話が出るので、S田専務やK田部長は、通訳としても世話になっていた。君が昨日の宴会で絡まっていたH川さん何かは、金さんのお友達や！」と答えた。

明石は「処で、M居さんがこの前、交渉に行かれた時は、その金さんが通訳されたり、交渉に出られたのですか？」

「いや。金さんは、使わなかった。M商事のソウルのI籐さんと二人でやった。相手は、貿易課の金課長と企画課の朴課長や、俺の書いた引き継ぎ書に書いているやろ！」と答えたので「なぜ、金さんを使われなかったんですか？」使ったら金さんに当然、コミッションを払わないといけないやないか！それに、交渉は英語やれるからという事で、俺とM商事の東京で決めたんや！ソウルのI籐さんの意見も同様で、金さんに出馬して貰わないで良いという事したので、敢えて連絡はしなかった」

「しかし、それは、韓国との商売の信義に劣ることはないのですか？金さんの商売は成り立っているのですか？」

「そんなん、信義でもないし、君が心配することではない。金さんにはM商事が我々の出しているコミッションからいくらか払っている。金さんは、我々のエージェントとではなく、M商事のエージェントや！連絡してもしなくても、しても、それは我々の勝手や」と自論を述べた。

明石は今回の交渉は、途中でM居から

のバトンを渡されてゴールまで走れ、それも、トップでテープを切れと言われたようなものだった。

明石は小学校の時から運動会で一等賞を取ったことは、一度もなかったし、中学、高校の個人競技、リレー競技で、抜かされた経験はあっても、死んだ兄貴のようなトップでテープを切った、ヒーローの経験は残念ながら一度もない。

この時以来、経験のない、しかもハードルが高い目標は、自分の能力だけで達成出来ないことは、重々承知している。優秀な人の知恵と能力と人脈を借りる、それが、明石のB級サラリーマンの組織の中で生き残れる道である。この会社に入ってから思っていた。

それだけに、今回は、M居のやり方を踏襲しては、目的である更なる値上げは、到底出来ない。出張に行けと言われた時に感覚的に分かっていた。

明石は「金栄の金さんは、会長、社長に差して話が出来るのであれば、この人を通じて、鄭常務、会長、社長に根回しをして貰うことしか、値上げは無理と違えますか？」とM居に問うてみた。

「それをすれば、D工業の窓口の貿易課の連中が、自分らがほぼ決めていた価格がなぜ変わるのかと反発するので、実務的に足を引っ張られるぞ！」

「そこは役割を分担すれば、良いではないですか？金さんに上層部に対し政治的に動いてもらい、私は、貿易課と実務で

交渉すれば、何とかなるのではないですか？」

「明石、お前は営業をやったことがないから、簡単に言うけど、値上げは、そう簡単に出来るものではないぞ！」

明石は、それに対し「営業はやったことは、ないですが、今までバイヤーとしての経験は入社以来ずっとやっています。

私は、売り手と買い手はコインの裏と表と違います。買い手の立場から売り手を見て来ましたから、買い手の立場に立つた売り手をやったらエエと思っています。

貿易課に対し値上げを認めてくれたら、今、約束している納期を一週間短縮し、しかも、組み立てに必要度の高い部品から優先的にコンテナに詰めて出荷すると言え、値上げの大義名分となり、貿易課の連中の顔も立つのではないでしょう

うか？早く作れば、それだけ早く売れる、製造の鄭本部長の顔も立ちますし、D工業の営業も他社より納期で有利な立場に立てるので、シェアアップに繋がりますよ。ウチにとつても、来年の受注増にも繋がるのではないのでしょうか？

それこそ「三方よし」ですね！」M居は黙って聞いていた。「私は堺工場で、過去に決めた無理な価格の部品単価の値上げと言

うか、値上げは言う言葉は工場では禁句で、あり得ないと資材の連中は教育されています。それで価格を変えるのは、大抵の場合値下げでした。値下げを、これを価格改定と言っていました、私は値上

げで価格改定しました。そしたら、協力会社の営業の古手のおっさんからは、アタだけや、値上げを認めてくれはったのわ！と言って、喜ばれ、何か困ったことがあれば、見返りか？よく助けてくれましたわ。まあ、その代り、本社から来たやつが、工場のタブーを破ったという事で工場での私の評価はBでしたがー。ここの輸出部に来て、担当者としての私の仕事は心得ているつもりです」と言う、「そう言っても、納期短縮なんか、無理と違うか？七月末が船積みギリギリやろ。それは、君が昨日、宇都宮工場に行つて来て交渉して来て、良く分かっているのと違うのか？」と聞かれたので「これは、工場に勤務した者しか分らない感です。私は一〇日位は余裕を持っていると直感で感じました。問題は、資材課の同期のM本と物流管理課の現場のK定作業長をどう協力させるかですね」と話しながら、一〇時過ぎに宇都宮工場のこの二人に電話をしようと考えた。

「今昔物語」巻第二十四に「藤原為時、詩を作りて越前守に任ぜられる語、第三十」という文章がある。藤原為時は「源氏物語」の作者である紫式部の父親。為時は一条天皇の時代、優れた漢学者としても有数の漢詩人としても有名であった。その為時が漢詩を作つて越前守となつたという話だが、もう少し詳しくいうと次のようである。

(一)

式部省の三等官である式部丞を勤め上げた為時が国司になりたいと何度も願い出たが、除目（地方官の任命に関する人事異動）の時に欠員がないということに、除目の時に欠員がなかった。このことを嘆いて、その後、内侍を通じて自分の任官を申請する文章を奉った。その中に次のような句があった。

苦学の寒夜 紅涙襟を濡おし
除目の後朝 蒼天 眼に在り
夜の寒さ厳しい中に学問するとき、涙は血となつて襟をぬらし、除目に選ばれなかった翌朝、抜けるような青空の色は、我が身に深くしみいる

内侍はこれを一条天皇のお目につけようとしたが、すでに天皇はおやすみになられていた。除目の修正を行う日に参内した道長がこの為時の申請書を見た。そして、「苦学の……」の句のすばらしさに



オクラの山たより (18)

困生

感動して自分の乳母子であった藤原盛国が任命されるはずであった越前守をやめさせて急遽この為時を越前守にした。これはひとえに申請書類にあった詩句に感心したためであり、世間でも為時を褒め讃えたという。

この話は有名な話らしく「古事談」や「十訓抄」などの多くの説話物に同様の話がある。「今昔物語」では長らく散位に甘んじた為時が自作のすぐれた漢詩によって越前守となったとされているが、実情は少し違う。

すでに長徳二年(九九六)一月二十五日の除目で彼は淡路守に任ぜられていたが、三日後の二十八日に道長が参内して急に越前守を盛国から為時に変えた。淡路国は貧しい下国であり越前国は豊かな上国である。受領としての収入は雲泥の差があり、この急な人事は大きな話題になったらしい。原因はたぶん前年にやってきた宋の商人朱仁聡。長徳元年(九九五)九月上旬、この朱仁聡も含めた唐人七〇余人は若狭国にまず来航したという報が朝廷にもたらされた。九月四日に右大臣道長は一条天皇にこのことを奏上している。そして、五日には公卿らによって審議され、その結果、九月二十四日には越前国に移されることが決定された。朱仁聡らはその後五年間ほどは日本に滞在したが、じつとおとなしくしていたというわけではなく、長徳三年(九九七)には若狭守源兼隆に乱暴をはたらいたと

いう記事が「小右記」にみえ、現地の官人とトラブルを起こしていたらしい。このトラブルメーカーの宋の商人の交渉役に藤原為時が見込まれたというわけである。当時、博多には鴻臚館が置かれて外国使節を迎えたように敦賀には松原客院(館)が置かれ、八〜十世紀の間、数次にわたり渤海国使を迎えていた。越前国の国府は武生(現在の越前市)にあった(その前は敦賀に所在した説がある)が、遠い北九州の地と違い平安京に近い敦賀にあった外交施設として重要な位置づけであったのだろう。しかも漢籍や唐物(宋国の高級な工芸品など)をもたらす宋の商人の起こしたトラブルとなれば漢学にきわめて秀でた人材が求められたのであろう。この点、花山天皇に漢学を教えたことのあるほど漢詩文に堪能な為時であれば適材適所といえる人事であった

さて、ここまでは藤原為時の成功談であるが、実はここに至るまでは苦節十年とでもいうべき時期が彼にはあったのである。

元暦元年(九四七)頃に生まれた為時は菅原文時に師事し文章生に挙げられる。同門の藤原有国と並んでかなり優秀であったらしい。その漢学の力を見込まれ貞元二年(九七七)東宮(後の花山天皇)の御読書始に副侍読を勤め、後に花山天皇に漢学を教えることとなる。東宮の即位にともなうて式部大丞(正六位上)にまでいたる。

問題はこの花山天皇である。記録を見ていると、為時が仕えた花山天皇には躁病の気味があったようである。花山天皇が奇行がちの「いみじう色(好色)」なる天皇であったことはまぎれもなく、関白の藤原頼忠などの上級貴族の娘を召し出して「さまあしく」執着した後に次々と捨て去ることをくりかえし、貴族のあいだに恐慌をもたらしたと「栄花物語」に書かれている。特に有名なのは「江談抄」

「古事談」に書かれた奇行である。花山天皇が自らの即位式を迎えようとする大極殿の高御座の上で、高御座の帳をあける役目をするために控えていた馬内侍(当時、女房歌人として有名であった)と交わったという。これだけでも「エーッ」とビックリするような話であるが、まだ、この話には続きがある。花山天皇のこの行為によつて発生した「冠」と「玉佩(着剣)」が揺れる音を天皇の「鈴」による「お召し」だと思つて、叙位任官の書類を持つて近寄つた天皇の近臣の藤原惟成(花山天皇の乳母子であった)は、

天皇の「邪魔だ、下がれ」という手振りをも「全部任せろ」という全権委任を意味すると強弁し好きなように叙位を行ったという。もちろん、これをすべて信じるわけには行かないが、中世になると花山天皇の子孫である神祇伯すなわち白川王家の娘が歴代の即位式で高御座の帳をあける役目をしたことを見ると単なる悪口であったというわけではなさそうである。

好色と奇行によつて評判の悪かつた花山天皇であるが、その執政のスタートはきわめて華々しかった。平安中期の学者大江匡房が「前代の」円融院の末、朝政はなはだ乱る。寛和の二年の間(花山の治世の間)、天下の政、たちまちに淳素にかえる(政治が本来の純朴なあり方に復古した)。」と述べているように花山新制は前代の治世に対する批判を正面に立てて政治の刷新をしようとした。史料がほとんどないので、不明な部分も多いのだが、活発な立法活動がなされたのは確かである。荘園整理令、弓箭・兵杖の禁止(平和令)、銭貨の強制流通令、沽酒法(物価統制法)、儉約令などからなる体系的な代替り新制が出されている。そのすべてを仕切つたのは、先に触れた藤原惟成であったといわれている。

この中であつて藤原為時がいかにほどのことをなしたかは不明である。新しい時代のニューリーダーのもと嵯峨天皇の御代に漢学に秀でた文人官僚たちが活躍したように、自分もまた活躍する場が得られると夢を思い描いたかもしれない。しかし、その夢も二年とは続かなかつた。寛和二年(九八六)六月、花山天皇は突然に出家し退位した。出家の原因は即位の翌年(九八五)七月、妊娠していた弘徽殿女御祇子が死去したことを嘆いたあまりのことであつたとされる。ただし「栄花物語」によれば祇子の死の原因は妊娠による里下がり希望した彼女を長く宮

中にとどめ、悪阻のなかを呼び出して執着した花山天皇の「あさましうものぐるをしい」姿にあった。ただし、歴史家によると低子の死は単に愛する人を失った

というだけではなく、政治的な挫折も意味しているという。低子の父は兼家（道長の父親）の異母弟、藤原為光。もし低子から男子が生まれていれば花山天皇の系統は為光の庇護のもと兼家・道隆・道長らの支配から離れ大きく展開したことだろう。しかし、母子ともに死亡し、それは花山天皇の政治的な希望を打ち砕くものでもあった。

「大鏡」によると、この突然の退位は藤原兼家の陰謀によるものであり、天皇に出家を扇動したのは道長の兄である道兼であった。花山天皇の出家・退位を知った惟成は潔く自らも出家した。藤原為時

も官職を辞し、以後、長い散位の時期を送ることとなる。まったく官職に就かなかつた十年の間、為時はいったいどうしていたか。息子二人と娘二人をかかえて貧困にあえいでいたか。その生活ぶりはよく分からないが、豊かではないものの食うに困るほどでもなかつたろうというのが大方の見方である。祖父の藤原兼輔は従三位の中納言であつて、それなりの財産と邸宅は持っていたはずであり、それが証拠に何度も具平親王や藤原道長らが主催する漢詩の宴（詩宴といつた）に参加している。ただ、官職はないのでヒマな時間があつたであ

ろうから、子どもの教育はかなり熱心にしたらしい。「紫式部日記」にはそんな時の風景が書かれている。

（弟の惟規が）童にて諸読み侍りし時、聞きならひつつ、かの人は遅う読み取り、忘るるところをも、あやしきまでぞさとく侍りしかば、書に心入れたる親は、『口惜しう。男子にて持たらぬこそ、幸ひなかりけれ』とぞ、つねに嘆かれ侍りし。

弟の惟規が、また子供で漢籍を朗読しておりました時、私はいつもそれを聞いたり忘れてしまつたりした所も、不思議であつたほどすら分かつたのです。だから、学問熱心だつた父は「残念だ。お前が息子でないのが、私の運の悪さだよ」といつもお嘆きでした。

紫式部が「自分褒め」をしているという珍しい言説として有名なところだが、このとき為時は息子の惟規に何を教えたのだらうか。菅原文時（菅三品）に紀伝道を学んだ彼であるから、たぶん三史（「史記」、「漢書」、「後漢書」と「文選」であつたにちがいない。場合によっては「日本書紀」や「続日本紀」という日本の史書も教えていたかもしれない。ここで大事なことは当代一流の漢学者といつてよい為時が大学寮で学ぶであろう漢学の内容を弟に教えている場に幼い紫式部もいたことである。そして「勉強しろ」と強制されたわけでもなく、たまたま弟のそばにいたというだけで漢学の内容を

得ていったこと、それも驚くべき早さでそれを習得したことである。

（二）

世に認められぬ漢学者として十年間を過ごした為時を娘の紫式部はどう見ていたか。十代から二十代の初めの時期にあつた彼女はすでに大人の目で父親を見ていたはずである。これについて明確な言説は残つてはいない。しかし、なんとなくそれを匂わせた微妙な言説ならばある。

「源氏物語」の第二一帖「乙女」に光源氏の息子夕霧が元服して大学寮に入學するといふくだりがある。従一位光源氏の息子である元服すれば自動的に四位となつても当然である。だが源氏は夕霧を六位とし、自分の半生の反省から大学で勉強させるといふ。理由を聞かれた源氏が答える。

「身分の高い家に生まれた者が官職階級のままで世の榮華におこる癖がついてしまつと、学問などで苦労したりすることは必要ないという感じを持つようです。……時世が変わり頼む人に先立たれて勢力が衰える晩年になると、人に軽蔑されて頼るところもなくなつていくでしょう。やはり学問を基礎にしてこそ心の働きが世間に認められるところもしいつかりといひたしましょう。源氏は夕霧に個人的学力をつけ和魂漢才でやつていかせようと考えているのである。この源氏の考えは当時の上級貴族の考えとしてはかな

りおかしい。多くの研究者が紫式部の体験から来る思いが反映されているとするが、筆者もそれに同意する。

それはさておき物語に戻れば、この源氏の考えに少し不満を持ちつつも夕霧は家庭教師について大学寮に入つてすぐ受けることとなる寮試の準備にかかる。そして、夕霧は驚異的なスピードで、しかも優秀な成績でこれを突破する。源氏や夕霧の喜びは当然であるが、最も喜んだのは夕霧の家庭教師であつた大内記である。大内記とは中務省の役人で詔勅・宣命を作り、位記を書く職である。位階は正六位上に相当しており、すぐれた儒者でかつ名文家が任じられた。要するに大内記とは漢学にも通じていて漢詩文にも秀でた人物である。はからずも光源氏の子の師となり、しかも夕霧はすばらしい出来映えを示した。これからは源氏の信任を得てどんどん出世するはずと大はしゃぎである。

大将杯さしたまへば、いたう多ひしれてをる顔つき、いとやせやせなり、世のひがものにて、才の程よりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じうる所ありて、かくとりわき召しよせたるなりけり。……この君の御徳に、たちまちに身をかへたると思へば、まして行く先は、ならぶ人なきおぼえにぞあらむかし。

源氏が杯をおさしになるので、すっか

り酔っ払っている顔つきは本当にやせ細っている。大変な変わり者で学問のわりに世に用いられず、人からも相手にされずに貧乏であったのを、お目にとまって、このように特別にお召しだしになったのであった。……源氏の殿のおかげで急に生まれ変わったようになつたと思うと、さらに将来は並ぶ者が無い声望を得ることだろう。

古来、学者に貧乏はつきものである。そんな貧乏学者の一人である大内記（中務省の中級官吏で正六位上相当）。栄養不良の老人が源氏のおめがねに出来ない夕霧の家庭教師になつたばかりに出世のチャンスをつかむ。別人と化した思いである。これは学者の娘である紫式部の夢であつた。

少女が玉の輿を夢見るように学者の子はおのれの学問が認められて、裕福な生活に一夜にして変ずることを夢見る。夢のようなことが現実起こる確率の低さを十分に理解しうる頭脳を持つゆえに、日夜孤高を持つる父の姿を見るだけに父が父の力を正当に認められて栄華を得ることを夢見る。そのとき父の喜びはどれほどであろう。大内記の姿には少女であつたときから見てきた為時の面影があるのではないか。すぐれた学才を持ちながら世に認められることの少なかつた学者の娘である紫式部。清少納言に対して「眞名書き散らし」と批判した式部の精神的なベースとしてこれを見逃すわけには行かない。

学者の家とそこに育つた娘ということとなると「源氏物語」にはもう一つ見逃

せない言説がある。「帚木」の巻にある有名な「雨夜の品定め」の一節である。

五月雨の降り続く夜。光源氏のもとに親友であり正妻の墓上の兄弟でもある頭中将が訪れる。ふたりに女性談義をしていと女性経験豊かな左馬頭と藤式部丞とが加わつてさらに話は盛り上がる。左馬頭は中流の女性を評価し、嫉妬深い女や浮気な女の体験談をした。頭中将は本妻に責められて身を隠した常夏の女のことを話した。そして、藤式部丞は学者の女の話をする。最後に左馬頭が気配りができて出しやばらない女が妻としては最高と話をまとめる。

以上が「雨夜の品定め」の概要であるが、紹介したいのは藤式部の体験談。つまり学者の女の体験談である。くりかえすまでもないが中流の貴族で学者の家の娘となれば紫式部こそがそうではないか。自画像か否か、いささか興味もわこうというもの。

藤式部丞がまだ文章生のころ。文章博士の所にいろいろと学問上のことを聞きに行くうちに博士から将来の婿にと見込まれる。しかし、妻によつて出世も決まる世のこと、貧乏で出世の手づるさえない博士の娘婿では将来が危ういと式部丞は娘と一生を共にする気はない。物語の中では博士の娘は愛と誠意の女に描かれている。だが、父親から漢学の知識をしっかりと伝授された娘は、その愛と誠意を伝える手段として式部丞にせつせと漢

詩文を教授するのである。妻とするには「こちらが恥ずかしい思いがして、気後れがする」ということで冷却期間をおき、やがて別れ話をするために博士の宅を訪れる。博士の娘はいつものうちとけた雰囲気ではなく間に物を置いて、その物越しに応対する。

声もはやりかにて言ふ。『月ごろ風病重きにたへかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなむえ対面たまはらぬ。まのあたりならずともさるべからむ雑事らはうけたまはらむ』といとあはれにむべむべしく言ひはべり。答へに何とかは。ただ、「うけたまはりぬ」とて、立ちいではべるに、さうさうしくやおぼえけむ、「この香失せなむ時に立ち寄りたまへ」と高やかに言ふを聞きすぐさむもいとほし、しばし休らふべきに、はた、はべらねば、げにそのにほひさへはなやかに立ち添へるもすべなくて

声もはずんで言いますには「先日から重症の神経疾患に堪えかねまして、ニンニクを服用いたし、はなはだ臭いものですから、直接の面会は御遠慮します。じきじきではなくとも間に合う用事はお聞きしましょう」と、いかにも殊勝にしめつけられました。これに何と返事をしましょう。ただ「わかりました」と言つて立ち去りますとき、女は物足りなく思つたのでしようか、「この臭気がぬけた時にお立ち寄り

ください」と声高に言うのを、聞き捨てるのもかわいそう、とはいえず、ぐずぐずしておられませんか、（それにまた）ニンニクの匂いまでもブンブンとしてくるのもたまらなくて

この後、藤式部丞が苦し紛れの歌を残して立ち去ろうとすると、博士の娘は即座に当意即妙の歌を返してきた。その才気のほどはさすがであつた、というのが話のオチである。これを聞いた頭中将は「嘘だろう」「鬼のほうがましだ」と大笑いをする。これは滑稽談であり、笑いの対象は「博士の娘」である。だが、なぜ彼女は笑われるのか。自分の持つ力を發揮して式部丞に漢詩文をかいがいしく教えようとする姿は美しいといえるが、ただニンニクの匂いとあけすけな女の物言いに物笑いとなる原因はある。「源氏物語」の研究者である玉上琢弥氏によればニンニクは加持祈祷の費用がない博士の貧しさのためだという。現代から考えれば、ニンニクのほうが祈祷なんかよりはつと病んだ身体にいいのだが、平安の世では高名な僧侶による加持祈祷の方がつと病氣治療に役立つとされた。紫式部の実体験かもしれぬが、当時の貧しい学者の家はニンニクの匂いがブンブンしているものだったらしい。

そして、女の物言いは明らかに漢文口調である。引用した文章の中で「風病」^{（くふうびょう）}「極熱」^{（ごくねつ）}「草葉」^{（そうや）}「服」^{（はく）}「対面」^{（たいめん）}「雑事」^{（ざつじ）}と確かに漢語が多い。これらの漢語は「重

きにたへかねて」「対面たまはらぬ」「まのあたりならずとも」「雑事ら」といった言い方とともに男くささを感じさせる。また「いと臭きによりてなむ」とはつきりと口に出すのも当時の女性らしくない。ここに描かれた漢学に長じた学者の娘の姿は、善女ではあるが、自分のすぐれた学問を外に出すのを慎まない女性の戯画化されたものだろうか。

自分の育った学者の家、そこに育った自分の姿を振り返って、この「学者の娘」を造形したのかもしれないが、それにしてもこの「学者の娘」像にはまったく同情というものが感じられない。これはどうしたことだろうか。紫式部の戦略があるのだろうか。少々、気になるが、今はこれ以上ふみこまないでおく。

(三)

ところで清少納言と違って紫式部はネクラな女性だというイメージが一般には強い。「清少納言を友だちに持ったら楽しそうだけど、紫式部はちよつとね」という評価はよく耳にする。確かに清少納言に対する酷評からみれば「人前ではすました顔をしているのに影でこそこそ悪口を書く人」と言われても仕方がないかもしれない。しかし、彼女の歌集である「紫式部集」から見えてくる式部像は若干違う。特に宣孝と死別する前の短歌を見ると、賢く、明るく、そして当たり前の若い女性であったのだと感ずる。たとえば

「紫式部集」の中に詞書とともに次のような歌が入っている。

降り積みて、いとむつかしき雪を、
搔き捨てて、山のやうにしなしたる
に、人々登りて「なほ、これ出でて
見たまへ」といへば、

ふるさとに帰る山路のそれならば
心やゆくとゆきも見てまし

父と共に越前国に下向し二年間ほど現地に滞在した折りの歌である。紫式部は二十五歳前後である。うつとしいほど雪が降り積もった日。人々が雪かきをして雪の山を作った。「ぜひ、こちらに出てきて雪山を御覧なさい」と人々が誘う。しかし、式部は「京に帰る途中で見るそれなら気も晴れようかと出ていって見るのだけ」と拒否。「こんな雪国、もううんざり。雪なんて見るのもいや。」という娘らしい甘えを見せた歌である。また、宣孝との新婚生活のころには犬も食わぬ痴話ゲンカを楽しんでいる歌もある。

こうした普通の女性の感覚を持った紫式部がどうして決して人の前にしやしやり出ようとはせず控えめな女性となったのか。昔からいろいろと意見は出されているが、「紫式部集」の中の短歌で見る限り宣孝が亡くなり彰子のもとに出仕するあたりからであるらしい。「紫式部日記」にはすでに私たちのよく知る控えめで人前では多くを語らない彼女の姿があるからである。

(以下、次回につづく)

【補足】

1 定子皇后と宋の商人朱仁聡

藤原為時が越前守となつて下向する原因となった朱仁聡は定子皇后といささか関係がある。藤原行成の日記「権記」によれば、長保二年(一〇〇〇)八月二四日の条に「大宋商客」朱仁聡が越前国にいたときに献上させた雑物の代金を皇后宮が遣わしたが、朱仁聡が大宰府に行つてしまつたため未納となり朱仁聡に訴えられるという事件が起きた。この記述から長保元年・同二年ころには皇后宮の使いが敦賀津に派遣され、朱仁聡から「唐物」を購入していることが分かる。当時の「唐物」は高価なものであつたろうから、三条宮に出御していた時期であるとはいへ、定子は皇后にふさわしい扱いを朝廷からされていたのである。

この定子にまつわるトラブルを越前国で処理したのは越前守であつた為時であつたはずである。ただし、長徳四年(九九八)春に紫式部は宣孝との結婚のため帰京しているの、朱仁聡と定子の皇后宮とのトラブルを直接見聞きしたことはないだろう。

2 大学寮のこと

大学寮は式部省によつて運営された古代の教育・官僚養成機関である。従五位上の「大学頭」以下の事務官と博士以下の教官が置かれた。教官の位階は低く最高でも文章博士が従五位下であつた。学生は五位以下の貴族の子弟である。学生が史記・漢書から出た五題の問題から三題に正解す

れば擬文章生となり、さらに式部省の試験(「省試」といった)に合格すると文章生(中国風に進士と呼ばれることもあつた)となつた。文章生の中から特に成績優秀者二名が文章得業生となり、ラスボスともいえる「対策(方略試とか秀才試ともいわれた)」があつて、この結果によつて官職への就職が左右された。

当時は、身分が高く生まれた者は大学に行かず、さつさと出世していく。大学寮を苦労して出ても勤め先は位階の低いポストである。内記や外記といった下級の書記官を勤め上げ、よほどうまくいった者で七、八〇で参議になる者もまれにはいたが、大部分はよくて五位どまりであつた。そのため受領の時代となると多くの文章生たちが受領たちとともに地方に下つた。事務能力に長じていて京の状況にも詳しい彼らは地方で重宝され、やがて地域の有力者と結びつき力を振るうようになる。

十世紀ころまで大学寮は多くの文人官僚を輩出して隆盛を極めたが、後に学問が「家」によつて継承される学問になる、つまり紀伝道(文章道)は菅原家と大江家、明法道は中原家によつて継承される家学というぐあいになつていき中世以降は実質的になくなった。

3 藤原為時の漢詩

「凡位を越える詩人」と大江匡衡から評された為時の漢詩を一つだけだが紹介したい。各句ごとに原詩と書き下し文を書き後に解釈を付す。詩題は「雨為水上糸雨、水上の糸となる」である。

暮雨濛濛池岸頭

暮雨濛濛たり

池岸のほとり

更為水上乱糸浮

更に水上の

乱糸になりて浮かぶ

経從潭面霑難結

経は潭面によりして

霑ひて結び難く

曳自波心脆不留

曳きは波心よりして

脆くして留まらず

細瀧応争漁浦藕

細かにそそぎては

漁浦の藕と争ふべく

斜飛欲貫釣磯鉤

斜めに飛びては

釣磯の鉤を貫かんてず

誰知流下沈潜客

誰か知らん

流下沈潜の客の

霜縷数莖夏裏秋

霜縷数莖

夏のうちの秋

日暮れの雨がモウモウとけぶる池の
岸辺、雨は次々と続いて水面で乱れた
糸のようになって浮かぶ。水面から
連なる雨の縦糸はぬれて結びにくく、
波紋の中心より伸びる雨の糸はもろ
くも切れてあとを留めない。糸の如
く細かに降り注ぐのは漁をする入江
に生える蓮の根の糸とはりあうよう
で、斜めに飛んでは釣をする岩場の釣
り針を通す糸ともなりかねないほど
だ。誰が知ろうか、水流の底にもぐ
って魚を取る漁師に雨の糸が降りか
かって、霜のような彼の白い髪の毛が
数本みえ、夏なのに髪に霜をおく秋に
なっていることを。

今城塚古墳と磐井の乱

九州王朝説から見た古代史

満田 正賢

初めて投稿する茨木市在住の満田です。私は大和朝廷一元説と対峙する多元的古代史観及び九州（筑紫）王朝説の立場で古代史研究をしています。今回は地元高槻市にある今城塚古墳発掘の歴史的意義を通説とは異なる見方でご紹介したいと思います。

一・九州（筑紫）王朝説とは

日本の古代、特に中国の史書と日本の史書の記述の内容が一致し始めるまでの間の日本の歴史は霧の中に隠れています。従来の大和朝廷一元説では理解出来ない中国史書の記述があるからです。

唐代の歴史を記述した「旧唐書」という中国の史書には「倭国」と「日本国」という二つの条があり、「日本国」伝は七〇二年の遣唐使の記述から始まります。この「日本国」の記述からは中国史書に記載されている内容と日本書紀の内容がほぼ一致します。

ちようど大宝律令が制定され継続的な年号の制定が始まった直後のことです。その前の歴代中国史書に記載されていた「倭国」というのは近畿王朝（大和朝廷）とは異なり、九州の筑紫を中心にした王朝であったというのが、九州（筑紫）王朝説の根幹部分です。有名な「讚・珍・濟・興・武」の「倭の五王」については、

通説では大和朝廷の各天皇に比定されていますが、「武」に比定されている雄略以前の各天皇の親子兄弟関係が倭の五王の記述と一致しない為、最初に朝貢した「讚」については、応神なのか仁徳なのか履中なのか特定できないような状態です。当時の中国との交流の主体は大和朝廷ではないという考え方は極めて自然な考え方です。

二・継体天皇と磐井の乱

日本書紀に記述されている様々な事件の中で、継体期に起こった「磐井の乱」は不思議な事件の一つです。磐井の乱は継体天皇が新羅征伐の為に決断した近江毛野臣下六万の兵の任那派遣を筑紫君磐井が新羅と通じて阻止しようとした反乱事件として描かれています。この時に磐井は火・豊二国も勢力下に置いていたと記述されています。

そして物部麁鹿火が征伐軍を率いて磐井を殺します。磐井の子の筑紫君葛子は糟屋屯倉を献上して死罪を免れたとされています。不思議なのはこの時に継体天皇が物部麁鹿火に「長門より東をば朕制らむ。筑紫より西を汝制れ」と言っているのです。この発言からはそれまでに大和朝廷が九州と長門を統治していなかった事実が浮かび上がってきます。大和朝廷はこの時に九州（筑紫）王朝を侵略した。そして筑紫王朝の勢力を弱めた。日本書紀はこの事件を「磐井の乱」と称して事実を逆転させて記載した。私はそのように受け止めています。

三・今城塚古墳発掘の価値

地元高槻市にある今城塚古墳は多くのことを教えてくれます。元禄期に隣の太田茶臼山古墳が間違つて継体天皇陵に治定されたことにより、今城塚古墳は宮内庁の管理下に置かれることをのがれ、古墳の徹底説明が可能になりました。これは偶然のもたらした僥倖です。この今城塚古墳は大和朝廷と九州（筑紫）王朝との関係を教えてくれます。

四、今城塚古墳を継体天皇陵とみなす根拠が存在します。百舌鳥・古市から大和に連なる大和川一帯の古墳群に対して、難波から近江につながる淀川水系を拠点とした豪族の古墳群と考えられています。そして、その中にあるただ一つの天皇陵が三嶋の藍（藍野）にあると記紀に記された継体天皇陵です。継体天皇陵が太田茶臼山古墳ではなく今城塚古墳であるとする意見は九割以上の学者の賛同を得ていとされていますが、この根拠について今城塚古墳の発掘を機に展開された各氏の見解を私なりにまとめたものを以下に紹介します。（出典：NHKスペシャル「大王陵、巨大はにわと継体天皇の謎」及び高槻教育委員会主催のパネルディスカッション「継体天皇の時代・徹底討論・今城塚古墳」）

(1) 太田茶臼山古墳は、形状が五世紀に制作された前方後円墳の形状であり、特に応神天皇陵とは墳丘の三段の段葉が極めて近似している。一方、今城塚古墳は、筑紫君磐井の墓とされる岩戸山古墳、継体皇后陵とされる西山塚古墳（公式にはその横の西殿塚古墳だがこれは四世紀

のもの）、皇妃目子媛の墓とされる熱田神宮横の断夫山古墳、この三つの墓と前方後円墳の形状が近似しており、いずれも六世紀前半のものと思なされる。又、皇后、皇妃の墓との近似性から継体天皇陵と見なすべきである。

(2) 太田茶臼山古墳に設置された埴輪と今城塚古墳に設置された埴輪は、どちらも近くにある新池埴輪窯遺跡で制作されたものである。しかし、太田茶臼山古墳の埴輪の刷毛目は横で仕上げ工程を伴った五世紀の制作方法であり、今城塚古墳の埴輪の刷毛目は縦で仕上げ工程を省略した六世紀の進化した工程で制作されたものがある。

(3) 今城塚古墳の埋葬者が継体天皇であるととした上での考察ではあるが、太田茶臼山古墳は天皇陵に匹敵する形式を持つていることから、継体天皇五世の先祖とされる応神天皇と継体天皇を結ぶ線上にある皇族「稚野毛二派王（応神天皇の子で仁徳天皇の異母弟）又は意富富等王（大郎子・稚野毛二派王の子で継体天皇の曾祖父であり、允恭天皇皇后の同母兄）、又は允恭天皇皇后・忍坂大中姫（安康・雄略天皇実母）の墓ではないかと推定される。

(4) 継体天皇陵は延喜式、扶桑略記には摂津国島上郡にあると記載されており、一方太田茶臼山古墳横の太田神社は延喜式に島下郡と記載されている。継体天皇陵を太田茶臼山古墳と治定したのは元禄期であるが、その理由は当時今城塚古墳が地震で崩壊していた為、高槻藩が問

合わせに対し「当藩にはない」と回答したことによる。又「藍」という名称については「藍野」は本来安威川と芥川に挟まれた一帯をさしていたが、後に「安威」という名称で島下郡の一部だけに残されたのではないかと推測できる。

五、今城塚古墳と九州との関連

(1) 今城塚古墳（全長三五〇メートル）、断夫山古墳（全長一五二メートル）、西山塚古墳（全長一一〇メートル）、岩戸山古墳（全長一三五メートル）の四つの古墳は相似した形の墳丘をもつ前方後円墳ですが、今城塚古墳を天皇陵として特徴付ける埴輪祭祈場「舞台」があるのは他に岩戸山古墳のみです。但し、今城塚古墳の埴輪が土製であるのに対して、岩戸山古墳のそれは、百体以上の阿蘇凝灰岩で作られた石人・石馬と呼ばれる筑後地方に豊富な石の埴輪であります。（出典：NHKスペシャル「大王陵、巨大はにわと継体天皇の謎」）

(2) 五世紀後葉に岡ミサンザイ古墳（伝仲哀天皇陵）が古市に作られて以来、六世紀前葉に今城塚古墳が築かれる間、王権（近畿王朝の王権・満田）は著しく不安定な状態にあつたと考えられます。このような時期に古墳にはそれまでになかったような現象が現れます。それは九州の古墳文化の諸要素が西日本各地に広がっていく現象です。この現象は主に二つのものに現れます。一つは九州的な横穴式石室が各地で作られたことで、他は九州産の阿蘇ピンク石で作られた刳抜式石棺が持ち運ばれたことです。（出典：高槻

教育委員会主催のパネルディスカッション「継体天皇の時代・徹底討論・今城塚古墳」）

(3) 平成二八年に熊本県宇土市で産出される阿蘇ピンク石（阿蘇溶結凝灰岩・馬門石）が今城塚古墳の石棺に使われていたことが発見されました。この石棺は修羅（木製のそり）と船を連携して運ばれたものと考えられますが、蓋と身を合わせた総重量が六・八トンもあり、同じ大きさの石を船で運搬する航海を再現したところ多大な労力と技術が必要ことがわかりました。但し今城塚古墳には阿蘇ピンク石の石棺の他、兵庫県高砂産の竜山石（黄色）、大阪二上山産の白石による合計三つの石棺が設置されており、継体天皇は他の古墳で最高位の石棺に使われている竜山石の石棺に埋葬されているのではないかと推測されています。（出典：高槻教育委員会主催のパネルディスカッション「継体天皇の時代・徹底討論・今城塚古墳」）

(4) 「催馬楽」の「難波の海」に次の詞章があります。

難波の海 難波の海 漕ぎもて上る
小舟大舟 筑紫津迄に 今少し上れ
山崎迄に
難波と山崎の間には樟葉津のほかに「筑紫津」がありました。高槻市津之江町に筑紫津神社が鎮座しています。この地は淀川の支流たる芥川沿いにあり、今城塚古墳も近くにあります。筑紫（九州）とこの地との直接の船の往来を暗示しています。（出典：高槻教育委員会主催のパネルディスカッション「継体天皇の時代・徹底討論・今城塚古墳」）

六・今城塚古墳と九州との関連に対する各氏の見解

(1) NHKスペシャル「大王陵、巨大はにわと継体天皇の謎」に出た山尾幸久氏(立命館大学名誉教授)の見解

「筑紫君磐井の発言からわかること、それは彼が大和王権に出仕していたことがあったということです。五世紀の中頃から近畿周辺の豪族だけでなく九州や関東の豪族が大和政権の中核に出てきて仕えるようになった。これは稲荷山古墳や

江田船山古墳の鉄剣の銘文からはつきりしている。つまり、若い頃に大和の宮廷で長いこと仕えて、地元で父親が亡くなったときに帰郷して、首長権を継承する。その時にこういう刀を中央でもらって帰って行くわけですね。筑紫君磐井も、そういう豪族の一人だったのです。磐井は

地方行政官ではありません。九州北部・中部の王者でした。大和王権が中国の皇帝や朝鮮半島の王朝から倭人種族の代表として認められていることには従いますが、彼は独自に外交や戦争が出来るような国家を打ち立てようとしたが、結局は挫折してしまふ。これが、磐井の乱の実像ではなかったかと思っているんです。」

(2) 高槻教育委員会主催のパネルディスカッション「継体天皇の時代・徹底討論・今城塚古墳」に出た和田晴吾氏(立命館大学名誉教授)の見解

「今城塚古墳、継体擁立の勢力基盤は、直接的に関係する勢力基盤の背景で九州勢力が大きな位置を占めていたものと推測されます。しかし九州勢力は一つの強

固なまとまりというよりも中期的な比較的穏やかな首長連合的まとまりで、畿内を圧倒するにいたらず、かえって王権による中央集権的な体制作りが進行する中では解体されるべき運命のものであったわけです。磐井の乱はそのような性格の戦であったと考えられます。

七・両氏の見解に対する私の見方

(一) 両氏とも、倭の五王が九州(筑紫)王朝の王であり、当時対外的には筑紫王朝が倭を代表していたという認識がないため、事実をアベコベにとらえています。

(二) 今城塚古墳を天皇陵として特徴付ける埴輪祭祀場「舞台」は筑紫君磐井の墓たる岩戸山古墳にも存在します。ではどちらが先に出来たものでしょうか。磐井は日本書紀によれば継体天皇崩御の三年前に物部鹿火に殺されています。岩戸山古墳は磐井の生前に作られ、磐井の死亡時には完成していたと考えなければなりません。今城塚古墳も一万本近い円筒埴輪の制作に優に二年、築造には四五年かかるとみられ、殯の期間十ヶ月ではとうてい間に合わないため継体天皇の生前から準備されていたものと思われま

す。しかし磐井が、完成した継体天皇陵の姿をみてそれをまねて自らの墓を準備したということはありません。一方継体天皇は、物部鹿火から完成された立派な磐井の王墓の報告を受け、造成中の自らの墓を偉大化する目的で、その技術を盗んで規模的には遙かに大きな規模で完成させようと思いついたということが十分に考えられます。

(三) 巨大古墳の建造には、それを作るうとする権力者の意思と共に、それを実現する技術者集団がいなければなりません。確かに五世紀には近畿に巨大王墓建造に強い執着を持つ権力者と古墳建築技術者集団の両方が存在していたと考えられます。しかし、六世紀の近畿にはそのブームが去っていました。一方磐井は王墓にふさわしい新しい様式の墓の建造(石人・石馬の祭祀場舞台)に執着していたと考えられ、又筑紫にそれを実行する技術者集団が存在していたものと思われ

ます。

(四) 継体天皇は、自らの王墓を完成させるために、当然のことながら王墓建築技術者集団を筑紫から近畿に強制移動させなければならなりません。この技術者集団が、今城塚古墳だけでなく六世紀以降の近畿の古墳を九州式の新しい様式に変貌させたと考えられます。すなわち、事実上は六世紀に九州の勢力が近畿に影響を強めたのではなく、五世紀に栄華を誇った九州(筑紫)王朝が、「磐井の乱」によって勢力を押しえられ、大切な王墓建設技術者集団までも奪われたという

ことであろうと考えます。

(五) 阿蘇ピンク石の石棺については、岩戸山古墳および九州の古墳群にいつさい使用されていないことから、岩戸山古墳を建造した技術者集団の移動とは別の流れであったと考えます。宇土近辺に九州(筑紫)王朝とではなく大和朝廷とながる権力者がいたと考えなければこのような現象の説明ができません。その可

能性があるのは筑紫侵略の前線基地を担ったと考えられる葦北国造です。葦北国造が、阿蘇ピンク石のパワーストーンとしての効力を継体天皇に報告すると共に、自分の権力を誇示するべく巨大な石棺を近畿に輸送したのではないのでしょうか。継体天皇は石棺としてすでに竜山石の石棺を準備していましたが、新しい王墓の象徴として阿蘇ピンク石の石棺を採用したのではないのでしょうか。

(六) なお、阿蘇ピンク石の家形石棺は、奈良県桜井市にあり今城塚古墳より古い五世紀後半〜六世紀初めの兜塚古墳に使用されています。そしてそれを先駆けとして近畿各地の墓に使用されています。兜塚古墳自体が初代葦北国造とされる三井根子命(日本書紀敏達条にある日羅の父葦北国造刑部鞞部阿利斯登の父)の墓であり、阿蘇ピンク石を石棺に用いた先駆けになったと考えると時期的に当てはまるのではないのでしょうか。但し三井根子命は先代旧事本紀によると継体天皇の八世祖先である景行期に葦北国造に任命されています。これでは年代的に一世紀以上の差が生じます。葦北国造の系図が偽りであるか先代旧事本紀及び記紀に記された景行天皇の記述が偽りであるかどうかからでしょう。

能性があるのは筑紫侵略の前線基地を担ったと考えられる葦北国造です。葦北国造が、阿蘇ピンク石のパワーストーンとしての効力を継体天皇に報告すると共に、自分の権力を誇示するべく巨大な石棺を近畿に輸送したのではないのでしょうか。継体天皇は石棺としてすでに竜山石の石棺を準備していましたが、新しい王墓の象徴として阿蘇ピンク石の石棺を採用したのではないのでしょうか。

(六) なお、阿蘇ピンク石の家形石棺は、奈良県桜井市にあり今城塚古墳より古い五世紀後半〜六世紀初めの兜塚古墳に使用されています。そしてそれを先駆けとして近畿各地の墓に使用されています。兜塚古墳自体が初代葦北国造とされる三井根子命(日本書紀敏達条にある日羅の父葦北国造刑部鞞部阿利斯登の父)の墓であり、阿蘇ピンク石を石棺に用いた先駆けになったと考えると時期的に当てはまるのではないのでしょうか。但し三井根子命は先代旧事本紀によると継体天皇の八世祖先である景行期に葦北国造に任命されています。これでは年代的に一世紀以上の差が生じます。葦北国造の系図が偽りであるか先代旧事本紀及び記紀に記された景行天皇の記述が偽りであるかどうかからでしょう。

能性があるのは筑紫侵略の前線基地を担ったと考えられる葦北国造です。葦北国造が、阿蘇ピンク石のパワーストーンとしての効力を継体天皇に報告すると共に、自分の権力を誇示するべく巨大な石棺を近畿に輸送したのではないのでしょうか。継体天皇は石棺としてすでに竜山石の石棺を準備していましたが、新しい王墓の象徴として阿蘇ピンク石の石棺を採用したのではないのでしょうか。

(六) なお、阿蘇ピンク石の家形石棺は、奈良県桜井市にあり今城塚古墳より古い五世紀後半〜六世紀初めの兜塚古墳に使用されています。そしてそれを先駆けとして近畿各地の墓に使用されています。兜塚古墳自体が初代葦北国造とされる三井根子命(日本書紀敏達条にある日羅の父葦北国造刑部鞞部阿利斯登の父)の墓であり、阿蘇ピンク石を石棺に用いた先駆けになったと考えると時期的に当てはまるのではないのでしょうか。但し三井根子命は先代旧事本紀によると継体天皇の八世祖先である景行期に葦北国造に任命されています。これでは年代的に一世紀以上の差が生じます。葦北国造の系図が偽りであるか先代旧事本紀及び記紀に記された景行天皇の記述が偽りであるかどうかからでしょう。

能性があるのは筑紫侵略の前線基地を担ったと考えられる葦北国造です。葦北国造が、阿蘇ピンク石のパワーストーンとしての効力を継体天皇に報告すると共に、自分の権力を誇示するべく巨大な石棺を近畿に輸送したのではないのでしょうか。継体天皇は石棺としてすでに竜山石の石棺を準備していましたが、新しい王墓の象徴として阿蘇ピンク石の石棺を採用したのではないのでしょうか。



飲食店で食事を終えて会計を求めるときに「おあいそ」と言うことがある。これは不思議な言い回しだ。「おあいそ」は「愛想」に丁寧の接頭語「お」を付けたものだから、会計時の「おあいそ」を略さずに言うことすれば「お愛想をお願いします」ということであり、愛想すなわちニコニコ顔をこちらへ向けてくださいと要求していることになる。これをさらにかみ砕くと、代金を支払うのでニコニコしてくださいネ！と言っていることになる。表情のことではなく、直接的には勘定書のことの説明もあるが、勘定書を「おあいそ」と言うに至った背景には代金受領に伴うニコニコ顔という発想があるはずだ。習慣的なこととはいえ、他者に対してその人にとって主体的であるはずの感情表現を強要するのは、面白くもなんともないステージパフォーマンスで「さあ、みんなと一緒に笑いましよう！ワハツハツハツ」と誘われてシラけた気分になると同じように、きわめて奇妙なことである。

こういうふうには原義的なところを突つてくなら、飲食店での「おあいそ」は本来は客の方から発する言葉ではなかったことが分かる。つまり「勘定書を持ってきてもよろしいか？」(会計をさせてもらってよろしいか?)という店側の意図を遠回しに表現するものだったわけだ。いったい、いつ頃から会計というニュアンスでの「おあいそ」が使われるようになったのか、そしてその言葉を客の方が口にするようになったのかは知らない。曖昧な記憶で恐縮だが、小学生だった頃だろうか、飲食店での会計のことを「おあいそ」という傾向が増えている旨がラジオかなにかで報じられたのに対して、気に入らない言葉遣いだと父親がぶつぶつ言っていたような気がする。幼い頃のこの記憶が、仮にも正しくかつそれが昭和四〇年代前半だと仮定するならば、三〇年代後半とかそのぐらいには使われるようになっていたのだろう。ちなみに、手許にある古い国語事典は、広辞苑の第二版補訂版(昭和五十一年、広辞苑初版は昭和三〇年)だが、「あいそ」の項にはすでに「勘定。勘定書。おあいそ」の記述が見られ、新明解国語事典第五版(平成一〇年、初版は昭和四七年)では、補足的に「店の側で言うのが本来の用法」という説明が添えられている。

この「おあいそ」のように、日常的によく使うわりには細かいところを詮索し始めると端からポロボロと崩れてくる言葉あるいはそもそもその謂われからして覚えられない言葉は存外に多い。思いついたところで挙げるなら、他人からの要求を快諾することを「二つ返事で受ける」とか表現するが、そこで言う「二つ」とはなんぞや?といった具合にある。この「二つ返事」に関しては、気になったからすぐに調べるとかの対応をすれば「はい」の承諾を二つ重ねて「はいはい」と返事することを指し、早く求めに応じている様子を表すとの解説に出会う。しかし要求された事柄に対し

「はいはい」と重ねるのは、どちらかというところか、本音では嫌だけど仕方ないからという態度の表れであるように思うが、これはイントネーションの違いか、さもなければきわめて個人的な受け止め方だろう。

あるいは、数字つながりで言うのなら「三つ指をつけて」というのはどうだろうか。丁寧なお辞儀の様子を表すとされているものの、正座の状態で深々と頭を下げる時、床に付けるのは指三本というのは、なんとなく奇異な姿勢である。辞書的には「親指・人差し指・中指の三本の指をつけて丁寧な礼をすること」となっているが、具体的にその三本を言うのではなく、何か比喩的な意味合いがあるのではないだろうか。実際、同じような疑問は他の人も抱くらしく、ネットでのやりとりにも挙がっていて、さまざまな解釈が提示されている。正確なところはよく分からなくなり、由来と実際との間で隔たりが起きている言葉の一つにカウントしておいてもよさそう。

言葉は時代時代によって移り変わっていくものであり、ひと昔前に使われていた意味がいつまでも同じ意味で使われ続けるとは限らない。そのものが使われなくなる言葉もあるだろうし、時々の要請に応えるかのように内容を変えていく言葉もある。象徴的なケースを拾うとすれば、前者なら漢文的教養に裏付けられた鴉外や漱石の言葉が現代では通用しなくなっていることであり、後者については「ヤバイ」が肯定否定両様のニュアンス

で使われるようになっていくといったあたりを挙げればいろいろ。IT業界を中心にカタカナ言葉が過剰に氾濫する現状も含めて、言葉は時代を映す鏡であると改めて思い知らされる。

ところで、どんな姿を変えていく言葉の群れを横目に、言葉の保守主義を標榜する人々もいる。国語学者の山田俊雄(故人)あたりはその最右翼といっているのだが、固陋に古い語彙や語法をひけらかすわけではない。いわく「望むらくは、修辞といえども、たしかに論理をふまえて建てられるべきことで、その論理の主角と、修辞の情調との間に安らぎがあり、釣合いがとれているならよいのである」と『ことばの履歴』。これだけでは、言わんとするところを理解するのは難しいので、いくらか推測を加えてかみ砕くなら、表現の論理と修辞の釣合いが求められているようだ。すなわち、正統な典拠をもった表現が適切に用いられることよって美しい言葉は作られるということか。いたずらに難解な言い回しを重ねるでもなく、かといって平易を求めて安きに流れることは是としない、しかるべき典拠に裏打ちされたほどよい緊張感のある言葉こそが美しいという立場なのだろう。日常的な会話の言葉ではもちろんのこと、推敲を重ねることのできる書き言葉でさえ、こうした思想を実践することは容易ではない。だがそれでも「情報洪水の中で感じる饒舌のむなしさ」(大岡信)を突きつけられた時などには、こうした言葉の保守主義に与したくもなる。

下村 嘉朗

ご紹介頂きました下村嘉朗です。

私は、となり町の京丹波町、昔の和知町の稲次の出身です。和知中学から須知高校、同志社大学へと進みました。麻田やすよしさんととは大学のサークルで出会いました。京都駅の南側の地域へ行き子供たちと遊んだり勉強したりするサークルです。私は半年ほどで山岳部に替わりましたが、麻田さんは卒業まで続けられました。

それ以後も、時々連絡を取り合っていて私が企画した同志社大学ヒンズークツシュ・カラム登山隊にも観光団の一員として参加してくれました。

六年ほどまえに私は、十万人に一人という難病になり全身の筋肉が破壊される病気にかかりました。大阪大学付属病院に入院した時には一段の階段も登れませんでした。入院中、麻田さんは見舞いに来てくれました。麻田さんは、私の影響もあって社会人山岳会に入り山登りの話しをしながら私を励ましてくれました。

私は運よく四ヶ月の入院で退院できました。そう思えたのは担当医が「まだ、あなたは運が残っていたんですね」と言ったからです。退院後、弱った筋肉を鍛えるために毎日、亀のように歩きました。朝夕暗い中でも、毎日、歩きました。麻田さんは、たびたび連絡をくれて励まし

てくれました。私が退院して一年ほどした時に、麻田さんが恒例にしている正月二日の愛宕山登山に参加したいというところ、それじゃあ、試験をしてやろうと暮れの三〇日に六甲山に連れて行ってくれました。何とか歩ける程度でしたが、麻田さんは友情で愛宕山の案内をして登らせてくれました。

この時に、麻田さんが毎年開かれる六甲山の全山縦走大会に参加していると聞き私も非常に興味を持ったのです。それから一年間歩く訓練をして何とか歩けると思ひ大会に参加しました。麻田さんがつきつきりで歩き励ましてくれたおかげで見事に五六キロを完走しました。制限時間一五時間半のところを一五時間一五分のギリギリでしたがフラフラになってゴールできました。六甲山全山縦走は須磨浦公園駅から出発し宝塚まで五六キロ、累積の登りが二八〇メートル、ピークは一四と非常に厳しいコースです。若い人でも苦しいのですが、歳を取るとさらに苦しくなります。しかし、完走した時の達成感はたまりません。

それから毎年、麻田さんたちと参加するようになりました。

麻田さんの山歩きを見ていて感心するのですが、彼の歩き方は粘っこい、弱音を言わずあきらめない姿です。これまで山岳部で多くの部員を見てきましたが、彼のように素朴で泥臭い登り方をする人はあまりいませんでした。どんなに苦し

くなくても周りへの気配りを忘れず優しく出来る人はなかなかいません。

麻田さんは中学から同志社へ行った秀才ですが、彼は同志社のスクールカラーとは違い泥臭く不器用な人間です。要領よく生きてきた人間ではありません。だから私は麻田さんが好きなのです。麻田さんもいい歳ですが、彼の体力であればまだまだやれます。六甲山全山縦走が出来る体力、気力があれば問題はありません。

どうか、皆さんのご支援をいただき麻田さんが当選し南丹江市議会で庶民の味方になって活躍してくれる事を念じてやみません。

私の病気は完治することはありません。いつ再発するかわかりませんが、歩き続けたことよって奇跡的に回復しハーフ・マラソン大会にも参加するようになりました。これもひとえに麻田さんら友人たちのおかげだと感謝しております。皆さん方におかれても、健康には歩くことが一番の薬だと信じて日々体を動かし歩かれることを最後に申し加えさせていただきます。麻田やすよしさんへの激励の言葉とさせていただきます。

南丹江市議会議員選挙に立候補し当選した麻田さんの演説会で友人として応援演説をした時の原稿です。事務所開きに友人たちと行き突然の指名で応援演説をしたら割と受けが良く、個人演説会でも依頼

されたので五分間の原稿にして二回させて頂きました。私にとっても初めての経験で楽しかったです。知り合いの高槻の議員さんにも、街頭演説が下手だ、原稿を書いて練習せなあかん、と偉そうな事を言っていました。自分がやってみると演説の難しさが分かりました。



編集後記

永年にわたり本誌に寄稿していただいたA〇さんが都合により芥川だよりを卒業されました。

プロの編集者として活躍されながら、ボランティアで毎回欠かさず原稿をお寄せいただき愛読者の方々を楽しませていただきました。本当にありがとうございます。今回、困丁生さんのご紹介で満田正賢さんが寄稿して頂きました。お勤めの傍らコツコツと研究されてきたと聞いております。邪馬台国はどこにあったのでしょうか？興味津々です。

五月には、恒例の芥川だよりの懇親会をやりませう。

ああ、このことか

「方丈記」の中で「ゆく川の流れ」。歌うことは苦手だけれど、本を読む、書いてみる、考える、暗しよをする。空想にふける。

(一節)

ゆく河の流れは絶えずして
しかも もとの水にはあらず

よどみに浮かぶうたかたは
かつ消え かつ結びて 久しくとど
まりたるためしなし

世の中にある人とすみかと
またかくの如し

これは、流れすぎていく川の流れは途絶えることがないけれど、それでいて、そこを流れる水はもとの水ではない。

川の流れのよどみに浮かんでい
る水の泡は形が出来たりして、その
ままの状態ではない。

この世に生きている人と住む場
所とは、この流れと泡のようである
という意味。

丹波に帰ったとき、田んぼ、山、
川、全然変わっていない、と思った
けど、違う。

全く知らない子供たち、野良着姿
の人たちも全く違う。

そこで遊んでいる子供、大人も違
う。「ああ、このことか」あの歌の
意味は。

それから、何かあると、「ゆく河
の流れ」の歌詞を心の中で読んでい
る。やはり歳のせいかな。

涙さえ浮かぶ 山奥の里へゆく
とこの一節が思い浮かんで、私を悩
ませてくれる。

何かを考える契機に…

「新聞で正しいのは日付だけだ」
そう毒づいていたのが、落語家立川
談志さんだった。

目を皿にして読むのだが、成人の
日、記事の見出しで「青春」となる
のが「春青」とひっくり返っていて
思わず、こんな事ってある…。

校正とは、「実に割の合わない仕
事だ」編集者の声。

一月一七日「おむすびの日」

助け合いを考える契機に、一九九
五年の今日、阪神淡路大震災が発生
した日。ボランティアの皆さんがお
むすびを炊き出し被災者を励まし
れたことに由来する。

単にお腹を満たすだけではない。
シンプルな行為から信頼関係が生

まれてくると思う。

癒しの湯で「おむすびを食べて自
殺を思い止まった青年」の話は有名
である。

同じご飯なのに、「おむすびの方
がおいしい、と言われるのは、手で
握るからこそ、人とのつながりを感じ
やすいからであろう。

手軽に持ち運べるので運動会や
遠足といった楽しい思い出。あるい
は、つらい心細い時に食べて、ほっ
とした思い出と結びつきやすい。

今は、毎日のように記念日がある。
その中で「おむすびの日」は結ぶ、
縁というものを大切に作るきっか
けにしたい。

若い人にもほ伝えたい。かけがえ
のない日であることも。

俳句

土田 裕

早春や定期券買ふ長き列

湯を通しさみどり走る新和布

啓蟄や地上に探す非常口

遠き日や蜩搔きせし里の川

ジーパンも膝を崩さず雛の前

影山 武司

風呂吹き奥に光の宿りをり

本堂の薮戸落とし冬構

電飾の巻かれし並木みな聖樹

極月の波頭を風のさらひけり

淡雪を搔きて小さき雪仏

佐保姫の草の裳裾のそよぎかな
梅の香と

一句をリュックに連れ帰る

朝ごとの会釈の軽し梅のころ

春耕の土の煙りてたなびけり

カーテンの揺るる病室風信子

